

洪丕謨・沈培方著《古代書法家軼事百則》訳注

監 訳 河内 利治

訳注者 鎌田 美里 (明神宗)

松丸有希子 (文徵明)

亀田絵里香 (董其昌)

宮内 紋 (張涇南)

宮木 繭子 (王 澐)

【解題】本訳注は、河内が担当する授業「中国書法文化特殊研究」における受講者の演習発表の成果をまとめたものである。監訳者はかつて今井凌雪先生主幹『新書鑑』誌138号(1987年1月号)から239号(1995年6月号)まで、「《古代書法家軼事百則》講読」と題して計88回の連載原稿を執筆した。しかし回数が示すように連載原稿は完結しておらず、「第86回岳飛《出師表》を書す」(南宋時代)で終わっている。授業では、この『新書鑑』誌の体裁を踏襲し、明清時代の軼事を受講者が分担して原稿を作成した。よって、ここに時代順に並べることとする。なお文責は監訳者にあることをお断りしておく。

明神宗雅好书法① (明の神宗 雅より書法を好む)

【原文】

神宗皇帝(ア)天藻^②飛翔, 雅好書法。毎攜獻之(イ)《鴨頭丸帖》(ウ), 虞世南(エ)臨《樂毅論》(オ), 米芾(カ)《文賦》(キ)以自隨。
一見(明)董其昌《畫禪室隨筆》(ク)

【書き下し文】

神宗皇帝, 天藻飛翔^{もと}, 雅より書法を好む^{つね}。毎に献之の《鴨頭丸帖》, 虞世南の臨《樂毅論》, 米芾の《文賦》を携えて, 以て自ら随う。

【原注】

①明神宗—明の神宗, 朱翊鈞。年号は万曆。在位は1573年から1620年まで, 48年続いた。

②天藻—皇帝の文章。またその才能を指す。

【訳注】

- (ア) 神宗皇帝—明神宗(1563~1620), 十四代目の皇帝, 諱は翊鈞, 穆宗の第三子, 在位48年。最も翰墨に心をとどめ, 書画に長じ, 収蔵に富んだ。王献之の《鴨頭丸帖》, 虞世南の臨《樂毅論》, 米芾の《文賦》, 顔真卿の《孝經》はその珍藏するところで, 一日も左右から離さなかったという。平日好んで大字を書し, 群臣に授けた。
- (イ) 献之—王献之(344~388), 会稽の人。字は子敬, 羲之の第七子。その書は家法を継ぐ。父王羲之を大王, 子王献之を小王と称し, 二人あわせて二王と併称する。
- (ウ) 鴨頭丸帖—東晋の王献之の書と伝えるもの。「鴨頭丸故不佳明当必集」云々の行草書尺牘二行十五字。墨跡本が現在上海博物館に収蔵されている。刻本では『餘清齋法帖』が佳刻である。
- (エ) 虞世南—(558~638), 余姚(浙江省)の人。字は伯施, 世基の弟である。諸学に通じ文章をよくし, 最も書法に長じた。欧陽詢・褚遂良とともに初唐三大家に数えられる。

- (オ) 樂毅論—東晋の王羲之書と伝えるもの。魏の夏侯玄の作。小楷四十四行。伝説によれば、右軍自ら石に書丹したものだが、もとより真跡は伝来せず、唐の太宗が搜訪した時も刻石によって得たといい、しかも太宗はこれを酷愛し、その卒するや昭陵に殉葬せしめたといわれる。
- (カ) 米芾— (1051~1107), 太倉の人, 襄陽に移居し, 呉に寓居す。字は元章, 海岳外史・襄陽漫士・鹿門居士・火正後人・恭門居士・淮陽外士などと号した。米法山水と呼ばれる特徴ある画風を創始し, 書は蔡襄, 蘇軾, 黄庭堅とともに北宋の四大家に数えられる。
- (キ) 文賦—西晋の陸機の作。行書一四四行。古来, 王羲之以下, 二, 三の書家がこれを書いたという。
- (ク) 【原文】は冒頭部分を「神宗皇帝」に作るが、『中国書畫全書』本では「萬曆皇帝」に作り、『筆記小説大観』では「神宗皇帝」に作る。また『景印文淵閣四庫全書』では「明神宗帝」に作る。これについて, 神田喜一郎氏は『画禅室随筆講義』の中で, 「『画禅室随筆』の各本の中, 甲本(康熙十七年, 汪汝祿引版本)には「神宗皇帝」の「神」の上に「明」の字がある。これは後人の妄添で, 明王朝の人である董其昌が, みづから「明」と書くことはない。それから乙本(康熙五十九年, 梁穆序刊本)には「神宗皇帝」を「萬曆皇帝」に作つてゐるが, これも元来やはり「神宗皇帝」であつたものであると思ふ。」と述べる。

【今译】

神宗皇帝文笔飞动, 平素很喜爱书法。(他)经常拿王献之的《鸭头丸帖》、虞世南临的《乐毅论》, 米芾的《文赋》作为自己随身的东西。

Shénzōng Huángdì wénbǐ fēi dòng, píngsú hěn xǐ'ài shūfǎ. (Tā) jīngcháng ná Wáng Xiánzhī de 《Yā tóu wán tiē》, Yú Shì nán lín de 《Yuè yì lùn》 Mǐ Fú de 《Wénfù》 zuòwéi zìjǐ suǐshēn de dōngxi.

【現代語訳】

神宗皇帝の文章はいきいきとし, 普段から大變書を愛好していた。彼は常に王献之の《鴨頭丸帖》, 虞世南の王羲之臨《樂毅論》, 米芾の《文賦》を, 自分の身の回りのものとしていた。

文征明日臨《千字文》① (文徵明 日に千字文を臨す)

【原文】

文徵明臨書《千字文》, 日以十本爲率, 書遂大進。平生於書, 未嘗苟且, 或答人簡札②, 少不當意, 必再三易之不厭, 故愈老而愈精妙。
一見(近代)馬宗霍《書林紀事》(ア)

【書き下し文】

文徵明, 『千字文』(イ)を臨書するに, 日に十本を以て率と爲し, 書遂に大いに進む。平生書に於いて, 未だ嘗て苟且せず。或いは人の簡札に答え, 少なくとも意に当たらずんば, 必ず再三之を易うるも厭わず, 故に愈いよ老いて愈いよ精妙なり。

【原注】

- ①文徵明— (1470—1559), 明の書画家。最初の名は璧(また壁に作る), 字は徵明。字で呼ばれたので, 字を徵仲に変えた。衡山居士と号した。長洲(現在の江蘇省呉県)の人。祝允明・唐寅・徐禎卿(ウ)とともに“呉中四才子”と称される。

《千字文》一昔の初学者用教科書。梁の周興嗣が撰した。王羲之の書跡から異なる一千字を選び、一句四語に編集し、自然・社会・歴史・倫理・教育などに関するあらゆる知識を順を追って述べている。隋代に流行し始めた。
②簡札一手紙・書簡。

【訳注】

(ア) 馬宗霍《書林藻鑑・書林紀事》(1984年5月文物出版社)には、原文に三点の文字異同が見られる。

(イ) 『草書千字文冊』は現在書道博物館蔵の作がある。

(ウ) 祝允明(1460~1526)、蘇州の人。字は希哲。右手の指が六本あったから枝山と号したと言われる。一時微官に任じたがまもなく辞して蘇州に還った。性豪放にしてよく遊里に出入りし、話題を多く作った。書は草書を得意とし、その書法は懷素に仿ったものと言われる。

唐寅(1470~1523)、蘇州の人。字は伯虎。六如居士と号した。南京郷試では解元で登第したが、京試では策謀によって失脚、以来自棄に陥ったのを文徵明の友情に救われたことが佳話として伝えられている。画技に秀で、呉派の中心的地位にあったが、惜しくも長生きしなかった。書は温雅で、王羲之書法の正統を墨守するものであった。

徐禎卿—蘇州の人。字は昌穀・昌国。詩名が高い。

【今译】

文徵明臨写《千字文》，每天以写十本为标准，书法因此大有进步。平生对于写字，从不马虎，如有回朋友的信札，稍不称心，必定要再三更改而毫不厌倦，所以他的书法年龄越大越加精彩工妙。

Wén Zhēngmíng lín xiě 《Qiānzìwén》， měitiān yǐ xiě shíběn wéi biāozhǔn, shūfǎ yīncǐ dà yǒu jìnbù. Píngshēng duìyú xièzì, cóng bù mǎhu, rú yǒu huí péngyou de xìnzhá, shǎo bù chèn xīn, bìdìng yào zàisān gēnggǎi ér háobù yànjuàn, suǒyǐ tā de shūfǎ niánlíng yuè dà yuè jiā jīngcǎi gōngmiào.

【現代語訳】

文徵明は『千字文』を臨書し、毎日十本を書くことを標準として、書法はこれによって大きく進展した。終生字を書くことに対して、いいかげんにすることはなく、たとえば友達への返信にも、意にかなわないことがあると、必ず何度も書き改めて少しもいやになることはなく、彼の書法は年齢を重ねるほどますます精彩を放ち技術が巧みになった。

董其昌发愤临池① (董其昌 発憤して臨池す)

【原文】

吾學書在十七歲時。先是，吾家仲子伯長 (ア) 名傳緒②，與余同試於郡③，郡守江西袁洪溪 (イ) 以余書拙置第二，自是始發憤臨池矣。
一見 (明) 董其昌《畫禪室隨筆》 (ウ)

【書き下し文】

吾れ書を学びしは、十七歳の時に在り。是れより先、吾が家の仲子伯長、名は伝緒、余と共に郡に試すも、郡守の江西の袁洪溪、余の書の拙なるを以て第二に置く。是れ自り始めて発憤して臨池 (エ) す。

【原注】

①董其昌一(1555~1636) 明代の書画家。字を玄宰，号を思白，香光居士という。華亭（現在の上海市松江）の人。官は南京礼部尚書に至り，諡を文敏という。書法は顔真卿に基づいてその書風を手に入れ，晋唐の諸家も兼ねて学ぶ。其の書は淡雅秀勁にして，“書卷の氣”があり，明清に与えた影響は甚だ大きい。（訳注：“書卷の氣”とは，詩・文・書・画などに表れる読書人の気品・風格をさす。）

②仲子一次男

③郡一古代の行政区名

【訳注】

(ア) 伯長一董其昌の甥の董源正，字は伯長。董と同じ試験を受け，立派な字によって，第一位の順番をつけられた。ただし，鄭威『董其昌年譜』（1989年・上海書画出版社）の「董氏世系図表」には，「董伝緒，字原正」と記載されている。

(イ) 袁洪溪一『景印文淵閣四庫全書』第八六七冊の『画禪筆隨筆』には，「袁洪溪」とある。袁洪溪一袁貞吉，字は孔安，洪溪と号す。江西南昌の人。嘉靖三十八年（1560）の進士で，隆慶元年（1567），松江の知府に任ぜられる。後進を抜擢して励ますことを好む。河南巡撫，左都御史を転任した。

(ウ) 『畫禪室隨筆』一全四卷，卷一論書，卷二論画，卷三紀游・紀事・評詩・評文，卷四雜言・楚中隨筆・禪悅よりなる。【原文】は，董其昌『容臺別集』には見えないが，董其昌が他にこの部分を書いた真跡が二種伝わっている。一つは『辛丑銷夏記』（卷五）に見える「論書卷」であり，一つは邵松年の『古緣萃錄』（卷五）に見える「論書畫四則卷」である。『辛丑銷夏記』には，「郡守江西袁洪溪」の下に「後官至御史大夫，諡簡肅。」という董其昌の自注がある。

(エ) 臨池一手習いをする。習字。

【今译】

我学习书法是在十七岁那年。在此之前，我家的堂房长兄名叫传绪，同我一起到郡里考试，郡的地方官江西人袁洪溪认为我的书法不妙而把我放在第二名，从此以后我便发愤练字了。

Wǒ xuéxí shūfǎ shì zài shíqī suì nà nián. Zài cǐ zhī qián, wǒ jiā de tángfáng zhǎngxiōng míng jiào Chuánxù, tóng wǒ yīqǐ dào jùn lǐ kǎoshì, jùn de dìfāngguān Jiāngxī rén Yuán Hóngxī rènwéi wǒ de shūfǎ bù miào ér bǎ wǒ fàng zài dì èr míng, cóngcǐ yǐ hòu wǒ biàn fāfèn liànzì le.

【現代語訳】

私が書法を学習したのは，十七歳の年である。これより前に，我が家の一族で伝緒という名の長兄は，私と一緒に郡の試験を受けに行き，郡の地方官で江西省の人である袁洪溪は，私の書法が良くないと考え，第二位に置いた。それからというもの，私は発憤して字を練習した。

张泾南折臂左书①（張泾南 臂を折りて左書す）

【原文】

張涇南司寇②（ア），墜馬傷右臂幾折，時方進呈《落葉倡和詩》③，遂用左手書楷，凝和（イ）蘊藉，無一獸筆（ウ），真造化手也。一見（清）阮葵生（エ）《茶餘客話》

【書き下し文】

張涇南司寇，馬より墜ち右臂を傷め幾ど折らんとし、時に《落葉倡和詩》を進呈するに方りて、遂に左手を用いて楷を書す。凝和蘊藉（オ）にして、一に猷筆無く、真に造化（カ）の手なり。

【原注】

- ①張涇南—張照（1691～1745）、清代の書法家、戯曲作家。初名を默、字を得天・長卿、号を涇南・天瓶居士（ク）という。華亭（現在の上海松江）の人。康熙四十八年（1709）、進士に及第した。撫定苗疆大臣などの職に就いた。
- ②司寇—周代の官の職名。後世においては刑部尚書の別名である。
- ③倡和詩—唱和詩。一唱一和、互いに呼応する。

【訳注】

- (ア)『古代書法家軼事百則』の【原文】と、『筆記小説大観』および『清代筆記叢刊』では文字に異なる部分が数箇所見られる。『筆記小説大観』では「司寇照」に作る。
- (イ)『筆記小説大観』では「凝厚」に作る。また『清代筆記叢刊』では「凝和」の前に「作小楷」という三字が入っている。
- (ウ)『筆記小説大観』と『清代筆記叢刊』では「無一筆呆滯」に作る。
- (エ) 阮葵生—清、江蘇山陽の人。字は宝誠。号は唐山・七録齋。乾隆の進士。官は刑部右侍郎。著に『茶餘客話』、『七録齋集』がある。
- (オ) 蘊藉—心が広くておだやか。味わいが深く余裕がある。
- (カ) 造化—万物を造り出し育てること。またその物をいう。
- (キ) 居士—学徳があるが、官に仕えない人。

【今译】

刑部尚書張涇南从馬上摔下來伤了右臂，差一点就要折断了，当时正向皇上进送《落叶倡和诗》，于是他就用左手写楷书，字字凝炼含蓄，没有一笔僵死的点划，真不愧是神手啊。

Xíngbù shàngshū Zhāngjīngnán cóng mǎ shàng shuāi xiàlái shāng le yòubì, chàdiǎn jiù yào zhēduàn le, dāngshí zhèng xiàng huángshang jìnsong 《luòyèchànghèshī》, yúshì tā jiù yòng zuǒshǒu xiě kǎishū, zì zì níngliàn hánxù, méiyǒu yī bǐ jiāngsī de diǎnhuà, zhēn bù kuì shì shénshǒu a.

【現代語訳】

刑部尚書である張涇南は、馬の上から落下し右臂を痛め、もう少しで危うく折るところであった。ちょうどその時、《落葉倡和詩》を皇帝に献上する時であったので、左手で楷書を書いた。どの字も、洗練されていて、奥深さがあり、一筆たりとも生き生きとしていない点画はなく、実に妙手に恥じることがない。

王澐有求必应①（王澐 求むるあらば必ず応ず）

【原文】

（王澐）告帰後②、書益工。遠近士大夫家、以金幣請者無虚日、然不問家人生産③。貧士丐其翰墨以舉火者④、亦應之不倦。 一見《清史稿・王澐傳》（ア）

【書き下し文】

(王澐) 告歸して後、書益ます工なり。遠近の士大夫の家、金幣(イ)を以て請う者虚実無く、然れども家人の生産を問わず。貧士の其の翰墨を丐いて以て拳火する者も、亦た之に応じて倦れず。

【原注】

- ①王澐—(1668—1739)。清代の書家。字は若霖、また自ら籟林と書す。号は虚舟。金壇(江蘇省)の人で、後に無錫へ移った。康熙年間の進士(ウ)。官は吏部員外郎。書はその当時王澐の右にでるものではなく、『淳化閣法帖考証』等を著した。
- ②告歸—昔は官吏が休暇を願い出て故郷に帰ることを「告歸」と呼んだ。
- ③生産—生計の道を謀る職業。生きるための仕事。
- ④拳火—火をおこして、ご飯を作る。『莊子』讓王篇に「三日火を挙げず、十年衣を製せず」とある。

【訳注】

- (ア)『清史稿』に「王澐伝」はあるが、原文は見当たらない。ここでは『清史列伝』文苑伝二と『清代七百名人伝』(下)を参照した。
- (イ) 金幣—お金。
- (ウ) 康熙進士—王澐は康熙五十一(1712)年に四十五歳で進士になった。

【今译】

王澐告老还乡后，书法越来越精到。远近有声望、有地位的读书人用金钱来请求墨宝的天天不断，但是(王澐)从不过问一家人的生计。穷苦人乞讨他的墨迹用以维持生活，他也欣然答应写给他们，不知劳倦。

Wáng Shù gàolǎo huánxiāng hòu, shūfǎ yuèlaiyuè jīngdào. Yuǎnjìn yǒu shēngwàng, yǒu dìwèi de dúshūrén yòng jīnqián lái qǐngqiú mòbǎo de tiāntiān búduàn, dànshì (Wáng Shù) cóng bù guòwèn yījiārén de shēngjì. Qióngkǔrén qǐtǎo tā mòjì yòng yǐ wéichí shēnghuó, tā yě xīnrán dāying xiě gěi tāmen, bùzhī láojiàn.

【現代語訳】

王澐は引退して故郷に帰った後、書道はますます精妙になった。遠近の評判の高い、地位のある知識人は、日にたえることなく金銭をもって彼の墨宝を買いに来た。しかし、(王澐は)ただ家族の生活の様子を尋ねるにすぎなかった。一方、貧乏な人が、生活維持のために彼の墨跡を物乞いに来ると、彼は喜んで承諾し、彼らのために書き、疲れを知らなかった。